

〔一〕 次の文章は、生徒会に所属する三人の男子高校生(晴人・由紀・悠真)と女子高校生(葵)が、後輩の中学生(誠)のトラブルを解決したあとの場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「夜食用に取っておいだ分だが、仕方ない。お前にやろう」

晴人がそう言って、手を開く。由紀は絶句した。そこに現れたのは、自分が今朝あげたブラウニーだった。てっきりみんな食べきったと思っていたのに、まだ残っていたなんて。

晴人が自分のブラウニーを誠にあげるのは、彼の自由だ。けれど……

「このブラウニーは、ここにいる由紀の手作りだ。味わって食えよ」

「え……。これ、先輩が作ったんですか？」

① 晴人の奴、余計なことを！ 自分で言っていて悲しいが、今日会ったばかりの、それも、ごつい男子高校生の手作りブラウニーを渡されて、喜ぶ男子中学生はまずい。誠の視線の中には、自分に対する嫌悪の光が混ざっていることだろう。

気持ち悪がられることには慣れていても、それを正面から受け止めるだけのタフさはまだなくて、由紀は顔を背けた。その耳に、誠の声が届いた。

「先輩、これすごくおいしいです！ ありがとうございます！」

「……………え？」

聞き違いかと思って、誠を見る。由紀は眼を〔 〕。誠が満面の笑みで、ブラウニーを頬張っていた。それも、自分の手作りだと知った上で、なんのためらいもなく。

「お前は、その……気持ち悪くないのか？」

「はい？ なにがですか？」

誠が② キョトンとした顔で首をかしげる。

「いや、気にならないなら、別にいいんだが……」

「まさか不破先輩、ずっと気にしてたんですか？ 今朝、松本先輩たちに言われたこと」

由紀の心臓がビクンと跳ね上がる。凶星すぎる指摘してきたのは、悠真だった。

「言いたい人には、好きに言わせておけばいいじゃないですか。それで自分の価値を下げてるのは、松本先輩たちの方なんですから」

「そうですね！ あんな人たちの言うことなんて、気にしちやダメです！」

力強く拳を握りしめた葵が、悠真に加勢する。

「先輩みたいに家庭的な男子は、男子高生の中にいたら浮くかもしれませんけど、そういうのが好きな女子はたくさんいますよ！」

だって、彼氏や旦那が家でおいしいご飯を作って待っていてくれたら、最高じゃないですか！

「……………そういうものなのか？」

「はい！ だから、先輩は先輩のままいてください！ 強面なのに家事万能なんて、最高のギャップ萌えですよ！」

胸を張った葵の横で、悠真が「不破先輩に萌えて！」と爆笑している。葵はムツとしたようだが、由紀は気にならなかった。

もしかしたら……と考える。もしかしたら、自分は今まで、③ 本当に狭い世界の中で、生きてきたのかもしれない。葵が言ったように、相手の性別が変わるだけで、こんなにも受け止め方が変わるのだ。大人になって、もっと広い世界に出たら、自分を受け容れる人は、さらに増えるかもしれない。

「俺は、もっと好きに生きていいのか？」

由紀がぼつりとこぼした。その問いに、葵が「当然じゃないですか！」と返した。

「不破先輩は自分に厳しすぎますよ！ 自由すぎるうちの会長に、④ 爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいです」

「おい」と、晴人がコウギの声を上げたが、葵は取り合わなかった。

「先輩はもっと自由に、料理とか編み物とか、好きなことを究めちゃってください！」

「そうか……なら、俺が毎日、生徒会に手作りのお菓子を持って行ったら、どう思う？」

「嬉しいですよ！」

「俺が、女装で学校に現れたら？」

「えっ……」

「冗談だ。今のは忘れてくれ」

さすがに調子に乗りすぎた。反省する由紀の前で、硬直しかけた葵が息を吹き返す。横で見えていた悠真がプツと吹き出した。

「不破先輩も冗談を言うんですね。今の女装(セ)ンゲンにはビックリしましたけど、大丈夫ですよ。僕たち生徒会のメンバーは、どんな先輩でも受け容れますから」

「……………ありがとう」

こんなにも嬉しく、頼もしい言葉をもらったのは、いつぶりだろう？ もしかしたら、晴人と初めて会った時以来かもしれない。

今はもう晴人だけじゃない。葵や悠真のような人たちがそばにいてくれるなら、自分を嫌いにならないで(オ)スむ気がした。後ろめたさを感じることなく、好きなものを好きだと言える日も、そのうち来るかもしれない。

⑤ 由紀は胸に湧いた温かな感情を抱きしめた。

(麻希一樹『未完成なぼくらの生徒会』より)

問一 傍線部(ア)の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。  
問二 アにあてはまる語句を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 奪われた      イ かけた      ウ くらんだ      エ 見張った

問三 傍線部①「晴人の奴、余計なことを！」とあるが、なぜ「由紀」はこのように思ったのか。理由を四十五字以内で説明しなさい。  
問四 傍線部②「キョトンとした顔」とあるが、このときの「誠」の様子として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア わけがわからず、不思議に思う様子。

イ 圧倒されて、おびえている様子。

ウ 驚きあきれて、声も出ない様子。

エ 相手の意見に、反論している様子。

問五 傍線部③「本当に狭い世界」とあるが、「由紀」にとつての「本当に狭い世界」とはどのようなものか。三十五字以内で具体的に説明しなさい。

問六 傍線部④「爪の垢を煎じて飲ませてやりたい」の意味として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「晴人」の自由な生き方を、「由紀」にもう少し見習ってほしい。

イ 「由紀」のきまじめさを、「晴人」にもう少し見習ってほしい。

ウ 「晴人」の究め方を、もっと「由紀」に見習ってほしい。

エ 「由紀」の家事万能さを、もっと「晴人」に見習ってほしい。

問七 傍線部⑤「由紀は胸に湧いた温かな感情を抱きしめた」とあるが、このときの「由紀」の様子として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことを受け容れてくれる人はたくさんいるのだという自信に満ちあふれている様子。

イ どんなものが好きでも、自分らしさを受け容れてくれる人がいる喜びを大事にしている様子。

ウ 自ら好きなものを伝えたことで、他人に受け容れてもらえた感動をかみしめている様子。

エ 冗談を言っても自分を受け容れてもらえないような関係を築けたという成長を実感している様子。

問題は次ページにつづく。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「将来」のことを考えるということは、〇〇になりたいという「夢」のことだと思ふ人は多いでしょう。

たとえば、自分は人より少しかわいしいし、少し歌も上手いからアイドルになりたい、なれるんじゃないか……とか。

もちろん可能性はゼロではないけれど、アイドルになるような人は、小さい時から人を集めて歌っていたり、かわいくて注目されたりしています。気がついた時には A 道ができていると思ふんです。

夢を持つということは素敵なことですが、何もないところに道を作るのは大変なことです。そういう意味で、自分の身の回りや興味の範ちゅうにないものを将来像として願っていても、 B 現実的ではないように思います。それに、今まで自分が好きだったことやものを全部否定することにもなってしまいます。

私は基本的に、<sup>①</sup>それはあまりしてほしくないと思つています。これまで自分が積み上げてきたものが、今の自分を作っているの、それを生かすということに C 目を向けてほしいです。

なぜ自分はここに生まれたのかとか、どうして自分はこれが好きなのかとか、自分の身の回りから考えていくと、将来というのは、そんなにうすばんやりとしたものではなくたってくるように思います。

たとえば、身近なところに将来の職業があるという意味で、親の仕事は継ぎやすいということはあると思います。 a もともとあるものに關して、人は意外とありがたみを感じ b ないものですが、大変さも含めて雰囲気を知っていることは強みです。

自分の好きなことを見つたり、知つたりすることは、とても大切なことです。どこまで、好みを貫くかも自分で決めていくことだから大事です。

将来やりたいことを探すためには時間が必要です。自分の向き不向きを見極めていくのはいくら早くてもいいんです。夢と自分の距離が開きすぎていると難しいと思うし、それでも切り拓ける人はいるけど大変です。

□、です。す。少なくて今まで積み上げてきたものがどんな人にもあつて、十歳には十歳の、十五歳には十五歳の積み重ねがあるでしょう。それは親にお願いしてでも見てもらつてほしいし、自分でも見つけてほしいです。それだけ d でも相当なことが分かると思います。もう e その人の得意なことは十歳でも明らかに出現していますから。

<sup>②</sup> そうやつて、小学校、中学校、高校と将来のことが、だんだんとリアルになっていくのが理想的な形なのかなと思います。本当に自分にぴつたりの仕事というのも、探していけば必ず見つかります。

ある程度の年齢になると人間は得意なことに逃げるようになるんです。そうすると得意なことがだめになっていきます。上手いかわいことを得意なことで解消するという <sup>③</sup> サイクルに陥つてしまうと、得意なことが得意でなくなっていくし、楽しくなくなつてしまいます。

例えば、介護の仕事が得意で、自分は高齢者のお世話については群を抜いていて、周りの人望も厚いという人がいるとします。その人に「私生活はどうなの？」と聞いた時に、仕事が充実していて忙しいし、私にはおじいさんおばあさんがいるからいいのと。結局、何かひとつのことに特化した人というのは、応用がきかなくなつてしまふんです。極端なことを言うとおじいさんおばあさんとは楽しく話せるけれど、同世代の異性とは口がきけないとか。

自分の得意な世界しか知らないと、悩み事があつても、他の角度から見ることができなくなつてしまいます。そうするとだんだん、得意なことが先細りになっていって、せっかくの才能がものすくもつたいないなと、最近、私はいろんな人を見て思うんです。今の世の中はこうでなければダメとか、強くいつたもの勝ちとか、その人が持っている自信を奪っていくことがいっぱいあります。だから、得意なことを強化して、自信を持てるようにという、その努力自体は間違つていません。

世の中があまりにも世知辛くて、外に行く自信を失うから、自分の得意な 枠 中で安心したいという思いが一層強くなつていくと思ふんです。それは誰にでもある心理だから分かるけど、そういうふうにごんごん逃げて、依存するようになると、ごんごん弱つていきます。自分を甘やかすことにもなってしまいます。そうやつて <sup>④</sup> 人生のバリエーションが、少なくなつていくのはつまらないことだと思ひます。

なるべく小さいうち、若いうちに万遍なくいろんなことをやつておいて、苦手なこともやつてみて人にとことん笑われるとか、好きだけに向いてないとか、そういうことをいっぱい経験しておくことも大切だと思います。

そうすると大人になつてから、本業のほうも上手くいくようになるでしょう。

(吉本ばなな『おとなになるってどんなこと?』より 問題作成のため一部改編)



三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これも今は昔、筑紫の人、商ひしに新羅に渡りけるが、商ひ果てて帰る道に、山の根に<sup>(a)</sup>沿<sup>よ</sup>ひて、舟に水くみ<sup>(b)</sup>入れむとて、水の流  
れ出でたる所に舟をとどめて<sup>I</sup>水をくむ。

そのほど、舟に乗りたる者、舟端に<sup>(c)</sup>ゐて、うつぶして海を見れば、山の影映りたり。高き岸の<sup>※</sup>三、四十丈ばかり余りたる上に、  
虎つづまりゐて、物をうかがふ。<sup>①</sup>その影水に映りたり。そのときに人々に告げて、水くむ者は急ぎ呼び乗せて、手ごとに<sup>※</sup>櫓<sup>ろ</sup>を押し  
て、急ぎて舟を出だす。その時に虎躍<sup>とつ</sup>り下りて舟に乗るに、舟はとく出づ。虎は落ち来るほどのありければ、<sup>※</sup>いま一丈ばかりをえ躍  
りつかで、海に落ち入りぬ。

舟を漕ぎて急ぎて行くままに、この虎に目をかけて見る。しばしばありて、虎海より出で来ぬ。泳ぎて陸ざまに上りて、<sup>(d)</sup>みぎ  
はに平なる<sup>II</sup>石の上に登るを見れば、左の前足を膝よりかみ食ひ切られて、<sup>※</sup>血あゆ。鰐<sup>わ</sup>に食ひ切られたるなりけりと見るほどに、そ  
の切れたるところを水に浸して、平がりをするを、いかにするにかと見るほどに、沖の方より鰐、虎の方を指して来ると見るほどに、虎  
右の前足をもて、鰐の頭に爪をうち立てて、<sup>※</sup>陸ざまに投げ上ぐれば、一丈ばかり<sup>III</sup>浜に投げあげられぬ。<sup>※</sup>のけざまになりてふため  
く。<sup>※</sup>頤<sup>おほ</sup>の下を躍りかかりて食ひて、二度三度ばかりうち振りて、なよなよとなして、肩にうちかけて、手を立てたる<sup>(e)</sup>やうなる岩  
の<sup>※</sup>五、六丈あるを、<sup>②</sup>三つの足をもちて下り坂を走るがごとく登りて行けば、舟の内なる者ども、<sup>③</sup>これがしわざを見るに、半らは  
死に入りぬ。

舟に飛びかかりたらましかば、いみじき剣、刀を抜きて合ふとも、かばかり力強く早からむには、<sup>※</sup>何わざをすべきと思ふに、肝心  
失せて、舟漕ぐ空もなくて<sup>④</sup>なむ、筑紫には帰りけるとかや。

(『宇治拾遺物語』より)

※ 三、四十丈……約一〇〇メートル

※ 櫓……舟をこぎ進めるためのさお状の道具

※ いま一丈ばかりをえ躍りつかで……あと約三メートルくらいを飛びつくことができず

※ 血あゆ……血が流れている

※ 陸ざまに投げ上ぐれば……陸の方に投げ上げると

※ のけざまになりてふためく……ひっくり返ってバタバタとしている

※ 頤……下あご

※ 五、六丈……約一五メートル

※ 何わざをすべきと思ふに……何ができるものかと思うと

問一 波線部(a)～(e)を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで答えなさい。

問二 二重傍線部I～IIIについて、動作の主体を次のア～エから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 筑紫の人 イ 虎 ウ 鰐 エ 作者

問三 傍線部①「その影水に映りたり(その影が水に映った)」とあるが、何の「影」のことか。適切なものを次のア～エから一つ選び、  
記号で答えなさい。

ア 筑紫の人 イ 山 ウ 虎 エ 鰐

問四 傍線部②「三つの足」とあるが、足りないものは何か。文中から五字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「これがしわざを見るに、半らは死に入りぬ(この虎の行爲を見て、半ば氣を失ってしまった)」とあるが、なぜ、「半ら  
は死に入りぬ」という状況になったのか。四十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「なむ」について、このような語があると文末は終止形からどの活用形に変わるか。適切なものを次のア～エから一つ選  
び、記号で答えなさい。

ア 未然形 イ 連用形 ウ 連体形 エ 已然形

問七 この作品は、鎌倉時代に成立した「説話」である。同じ時代に成立した作品を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 枕草子 イ 源氏物語 ウ おくの細道 エ 徒然草

問題は以上です。